AUGUST
千の刃濤、桃花染の皇姫
せんのはとう、つきそめのこうき
オーガストオフィシャルハンドブック
2015年夏号

千の刃濤、桃花染の皇姫
せんのはとう、つきそめのこうき

安寧の日々は灰燼に帰した——

黎明から二千年、一系の皇帝により統治されてきた皇国は夷狄（いてき）の手に落ちた。

当たり前だったものが、次々と崩れていく毎日。

時代の奔流に弄ばれながらも、人々は逞しく未来を探し続ける。

たった一人残された帝位継承者《宮国朱璃（みやぐにあかり）》は力を求めていた。

仇敵を排除し、この国を取り戻さなくてはならない。

過去を失った武人《鴇田宗仁（ときたそうじん）》は主を求めていた。

鍛え上げられた白刃は、忠義のために振るわれねばならない。

その日、

運命に導かれ、二人は出会う。

往く先にあるのは失意か祝福か、答えを知る者はどこにもいない。

シナリオ◆榊原拓・内田ヒロユキ・安西秀明

原画◆べっかんこう・夏野イオ　BGM◆ActivePlanets

発売日未定　※18歳未満の方はご購入になれません

物語

Story

豊葦原瑞籬内皇国（とよあしはらのみずがきのうちのすめらみことのくに）——、

通称《皇国》と呼ばれるこの国では昔、天津民とまつろわぬ民が争い合っていたという。

残虐なまつろわぬ民による侵攻を妨げるべく、天津民の巫女たちは神に祈りを捧げた。

神は祈願を聞き届け、娘である《緋彌之命（ひみのみこと）》を天津民に遣わす。

緋彌之命は、三種（みくさ）の神器を持っていた。

全ての厄災を斬る刀、《天御剣（あめのみつるぎ）》

あらゆる厄災から身を守る鏡、《天御鏡（あめのみかがみ）》

そして、あまねく知恵を授けてくれる《天御勾玉（あめのみたま）》である。

緋彌之命は天津民を率い、三種の神器を用いてまつろわぬ民を地下深くへ封印する。

救世主となった緋彌之命は王に迎えられ、天津民は大いに繁栄した。

これが、豊葦原瑞籬内皇国のはじまりと言われている。

それから約２千年、皇国は緋彌之命の子孫が代々治めてきた。

長い歴史の中で幾度となく侵略に晒されながらも、国土は一度として汚されていない。

巫女の呪術によって作り出された国防装置《呪壁》があらゆる敵の侵入を拒み、

侵入を許したとしても、強化人間の《武人》が斬り伏せる。

武人が斃れた時には、三種の神器が大御神の力で全ての厄災を取り除く。

しかし、皇国の不敗神話は突如として終わりを迎えた。

皇国歴２１７３年、皇国はオルブライト共和国の侵攻を許してしまう。

呪壁は破壊され、武人は次々に斃れ、三種の神器は奇跡を起こさなかった。

敗戦から３年経った今、言論や報道の統制も進み反攻の芽すら刈り取られたかに見える。

だが今もなお、皇都・天京には皇国民の怒りが渦巻いていた。

皇国

約二千年前に建国されて以来、中立を貫いている国家。皇帝による君主制で成り立っており、ここ数百年に至っては小さな内乱すら起こっていない平和な国だった。
他国にはない《呪術》という門外不出の技術を用いて国土を守り続けていたが、三年前に共和国の侵攻を許してしまう。

宮国 朱璃
Miyaguni Akari
P8

鴇田 奏海
Tokita Kanami
P10

椎葉 古杜音
Shiinoha Kotone
P11

稲生 滸
Inou Hotori
P12

オルブライト共和国

世界最大規模の国土と人口、そして武力を誇る国家。民主主義を根付かせる、という大義名分を掲げて世界中で侵略戦争を行っている。君主制である皇国とは根本的に相容れない国。機械兵器を駆使する戦い方もまた、呪術や刀を使って戦う皇国とは対極である。

エルザ・ヴァレンタイン
Elsa Valentine
P13

世界観

World

世界全体

数百か国の国々が存在しているが近年では侵略戦争を開始した共和国の一強状態になっている。
世界平和の維持を目的に多くの国々が加盟している《国際平和維持機構》という国際組織があるが、非加盟国である共和国の侵攻に対して大きな効力は発揮できていない。

天京

皇国の首都として長く栄えている都市。人口は五百万人。皇帝が暮らす帝宮のほかに《呪壁》の発動装置や《三種の神器》、武人が暮らす《武人町》など国防の要も有している。そのため、天京の陥落は皇国の滅亡に等しい。
敗戦後は帝宮を中心に共和国人が占有する《共和国管区》が指定され、二万人もの皇国人が管区外へ強制移住させられた。

生活水準

共和国に敗戦して以降、多くの公益・流通が共和国軍の監視下に置かれ、多くの大資本は解体の憂き目にあった。一般に流通する物資も少なく、庶民の生活は楽ではない。盗品や共和国軍からの払い下げ品、国内で正式には流通を許されていない品等を扱う店が並ぶ夜鴉町などの闇市で、人々は多くのものを手に入れ生活している。

技術水準

皇国の科学技術は、兵器以外の部分については共和国に遅れを取ってはいない。自動車や携帯電話など、デザインは皇国独自のものが多いが、性能では他国と同等の水準を有している。《鴇田宗仁》の自宅にも、冷蔵庫や電磁調理器（レンジ）が置かれている。

伊瀬野

天京の遥か西に位置し、神職に携わる者が多く暮らしている門前町。皇學舎（こうがくしゃ）という学校があり、そこでは多くの巫女が呪術を学ぶ。《緋彌之命》が建立したとされる皇国最古の神殿が残っており、皇家の人間にとっては祖先の故郷とも言える場所である。

天京帝立学院

◁ 戦前は皇国で最も権威があり、全人的な教育を行っていた名門学校。しかし、戦後は共和国軍に接収され、主に共和国人の子女が通う学校となっている。
何割かは皇国人学生も通っているが、講義内容が共和国が行う侵略戦争の正当性を主張するものだったりするなど、学校としての質は変わっている模様。

夜鴉町（よがらすちょう）

◁ 戦後、皇国人によって設けられた非合法な闇市の通称。盗品や共和国軍からの払い下げ品が商品として並んでおり、特に爆撃された武人町の焼け跡から出た呪装刀は高額で取引されている。
路地は狭く迷路のように入り組んでおり、共和国軍に追われる者が逃げ込むことも少なくない。

美よし

▽《更科睦美》が女将を務める居酒屋。路地の奥にあり看板や暖簾などもないことから、一見の客が入ることはまずない。
店内には毎晩のように武人が集まり、賑やかな雰囲気が漂っている。奉刀会の情報交換も行われており、武人たちにとっては必要不可欠な場所の一つである。

帝宮・外観

天京帝立学院・教室

キーワード Keyword

皇帝

皇帝位は代々皇家の女性が継いできた。これは初代皇帝の《緋彌之命(ひみのみこと)》が女性だったことに由来している。
神の遣いだと言い伝えられる《緋彌之命》の子孫であることから、皇帝は三種の神器を発動できる唯一の存在とされる。
そのため国民からは国の守護者として崇められている。

皇家

《緋彌之命》の血を引き、皇国の安寧と豊穣を守ることを責務としている一族。
皇家の子女は一定年齢になるまで国民の前に姿を晒さないという伝統があり、歴代皇帝の未熟な時代を知る者は少ない。
親政である皇国において、皇家の人間は優れた政治家としての教養を身につける必要がある。

呪装刀

巫女の呪術によって強化され、鉄すらも斬ることができる刀。武人が手にした場合にのみ力を発揮するため、通常の人間が使用することは不可能である。
呪装刀は巫女が命を捧げることによって作刀され、圧倒的な攻撃力のほかにも、身体強化や洗脳など特殊な能力を持つものもある。数は少なく、限られた立場の者だけが所持している。

政治形態

皇国は建国以来、皇帝による親政を行ってきた。皇帝をはじめ基本的には世襲だが、優秀な者が取り立てられることはあった。
戦後は臨時政府が設置され、共和国の利となる独裁的な政治体制が敷かれている。
共和国による民主主義の導入が予定されているものの、戦後三年経った現在も実施される気配はない。

奉刀会

戦後、身分と俸給を失った武人たちによって作られた組織。武人の職業斡旋や、戦死した武人の遺族の救済などを表向きの活動としていた。真の目的は共和国軍の殲滅と皇国の奪還だったが、決起を目前にして特別情報部に検挙されてしまう。
現在は前会長の娘である《稲生滸》が代理会長を務め、地下組織化している。

市街地

市街地

勅神殿・外観

勅神殿・道場

娯楽芸能

風流を好む国民性から、舞踊と音楽が国民の主な娯楽となっている。
皇国の伝統舞踊《桃花染（つきそめ）の舞》など古風な美しさを追究する方向とは別に、最近は共和国文化と融合した新たな独自文化も生まれている。
芸能界においては、戦後に突然現れた人気女性歌手《菜摘》が脚光を浴びている。

武人

遥か昔、初代皇帝《緋彌之命》の死後、皇国人は三種の神器に等しい兵器を作ろうと試みた。そして多くの巫女を犠牲にした強大な呪術で、一人の強化人間が生み出される。彼は《大祖》と呼ばれ、この大祖の子孫こそが武人である。大祖の血を最も濃く継いだ稲生家の武人は、一人で二千人の敵を斬り伏せることができるという。

戦前の防衛機構

皇国は常に不可視の壁に囲まれており、その壁は人や者に関わらず敵意のあるものを阻んでいる。この壁は《呪壁》と呼ばれ、国防の要とされていた。
日々の稼動には巫女たちによる制御が必要であるため、発生装置のある帝宮には多くの巫女が常駐していた。
戦時中は突然稼動が停止したが、原因は不明。

季節

皇国は季節感が豊かで、およそ三ヶ月の周期で春夏秋冬の季節が入れ替わる。特に国民は、初代皇帝の《緋彌之命》が愛でていた桃の開花時期である春を好んでいる。
桃の色である「桃花染」にちなんだ行事や言葉が皇国には多く、春に行われる《桃花染祭り》、若き乙女の涙を指す《桃花染の涙》などがある。

呪術

皇国のみに存在する独自の技術であり、呪術を扱えるのは巫女や神官など神職の者だけである。大御神の力によりこの世の因果を捻じ曲げることで、様々な奇跡を起こすことが可能となる。
しかし代償として、身体には大きさな負担が掛かってしまう。そのため、呪術を生業とする巫女は短命である。

椛谷生花店

首相官邸／総督府・外観

昨日はありがとう、
また会うことができて本当に嬉しいわ。花屋さん……。
いえ、鴇田宗仁君。これからもよろしくね

Name／

宮国 朱璃

みやぐに あかり

スリーサイズ 85D／57／84 好物 あんみつ

Info／

先代皇帝の一人娘であり、最後に残された正統なる帝位継承者です。敗戦時の混乱のさなか、母親である皇帝は崩御するものの、彼女は辛うじて敵国の手を逃れました。その陰には、主人公・宗仁の獅子奮迅の働きがあったと言われています。戦後は身を守るため正体を隠し、王家を再興すべく臥薪嘗胆の日々を送ってきました。宗仁が通う学園に転校してきたことにも、何か目的があるようです。

生まれながらの高貴さを持ちながらも感情表現は豊か。上品かつ屈託のない笑顔には誰もが心を奪われます。嬉しくても悲しくても泣いてしまうタイプで、周囲にからかわれないよう必死に涙をこらえていることも。

イラスト紹介

◆ 鉛筆ラフイラスト

◆ 制服イラスト

呪装礼装｜戦時中、帝宮から逃げ出す際に《宮国朱璃》が持ち出した皇家に伝わる家宝。呪装刀と同様に、巫女の呪術によって特殊能力が付与されている。身に付けることで特殊な防御力を発揮し、またいくらか身体能力も向上する。朱璃は露出度の高さを少しだけ気にしている。

母親｜《宮国朱璃》の母親は《蘇芳帝》と呼ばれ、威厳のある皇帝として国民に慕われ政治も安定していた。また勉強嫌いで剣術にかまけている娘を咎めないなど、母親としても寛容な人物だった。戦時中に小此木の手により殺害されたが、国民には戦争の責任を負って自害したと発表されている。

小此木による蘇芳帝の殺害｜皇国を裏切り、皇帝である《蘇芳帝》を殺害した逆臣・《小此木時彦》。小此木は戦後、宰相の地位に就いて共和国に利する政策を続け、反抗するものは容赦なく取り締まってきた。母の仇であり、売国の徒と化した小此木を討つことを《宮国朱璃》は目標としている。

墓場｜天京中心から少しだけ外れたところにある高い丘の上には、皇族の陵墓が存在している。街並みを一望できることもあり、皇国民ならば必ず一度は訪れる場所。戦後は、自害したとされる《蘇芳帝》が埋葬され、三年経った現在でも毎日のように花が供えられている。

性格｜感情表現豊かで直情的。激昂すると感情任せに行動してしまう未熟な部分がある。皇帝の一族であることを誇りに感じていたが、現在では敗戦の責任が心の重荷になっている。嬉しくても悲しくても「泣いて」しまう癖を持っており、皇帝には相応しくないとして直す努力をしている。

里中｜戦時中、《宮国朱璃》と共に伊瀬野へ逃げ延びた老女官。数百年前から皇家に仕えてきた一族の末裔であり、皇族への忠誠は厚い。伊瀬野では朱璃の世話係と剣術の鍛錬を行っていた。共和国から皇国を取り戻すため、厳しい鍛錬を朱璃に課していた。

能力・特徴｜幼い頃から学問よりも剣術に励んでいた。《鴇田宗仁》や《稲生滸》には及ばないが、剣の腕は独学ながら相当のもの。泣いた時は涙が流れず、代わりに桃の花弁が現れて身体の周囲を舞う。本人は呪いのようなものと言い、あまり好ましく思っていない。

脱出｜突如として共和国の侵攻が始まった際、皇族の暮らす帝宮は混乱に陥った。《宮国朱璃》の母親である《蘇芳帝》も小此木の手により命を落としてしまう。朱璃は皇族唯一の生き残り、そして皇国の最後の希望として天京からの脱出を余儀なくされた。命からがら、里中と共に伊瀬野へ逃げ延びる。

TOKITA SOUJIN

Name／

鴇田 宗仁

ときた そうじん

Info／

先の戦争において、家族だけでなく過去の記憶まで失った武人です。
戦後しばらくは稲生家で世話になっていました。
現在は町の花屋【糀谷生花店】で働きながら一人暮らしをしています。
道場で師範代を務めていたほどの剣の腕を持ち、仕えるべき主がいなくなった今でも鍛錬は怠りません。
性格は武人らしく実直そのもの。かつては冗談の一つも言えない性格でしたが、花屋の仕事のお陰か最近は肩の力が抜けてきたともっぱらの評判です。
本編の主人公です。

イラスト紹介

◆ 鉛筆ラフイラスト

武人｜《鴇田宗仁》の武人としての能力は非常に高く、武人社会の筆頭である稲生家に匹敵するほど。そのため奉刀会では師範の立場にある。戦後、敗戦の戦犯として扱われている武人の立場を受け入れており、共和国の手から皇国を取り戻す以外に汚名返上の方法はないと考えている。

記憶｜《鴇田宗仁》は戦争で負った怪我が原因で、戦時中までの記憶を失ってしまっている。幼馴染の武人である《稲生滸》の献身的な世話により、常識や知識は生活に支障ないところまでは回復した。戦時中の自分を知る者を探しているが、戦後三年に至る現在まで見つかっていない。

誇りと焦り｜《鴇田宗仁》は記憶のない戦時の自分に対し、「戦場で逃げ回っていたのではないか？」という疑念を持ち続けている。武人の誰もが抱えている敗戦の雪辱や、そこから来る皇帝への誠忠の思いにも心から共感できず、武人の誇りを失った現在の己をハリボテの武人だと自嘲するようになった。

花屋｜戦争で負傷し記憶を失った鴇田宗仁は、《糀谷生花店》の店長である《乾鷹人》に拾われた。戦後はそのまま糀谷生花店で働いており、宗仁は乾に対して深い恩義を感じている。花の配達を行うことの多い宗仁は、共和国管区への通行許可証を所持しているため、一般の皇国民が気軽には入れない場所に出入りすることができる。

戦争と終結｜皇国と共和国の戦争は、僅か数日のうちに共和国の勝利で終結した。半数以上の武人が戦死し、首都である天京は共和国軍の支配下に置かれてしまう。生き残った武人たちは終戦後も皇国を奪還すべく活動を続けており、《鴇田宗仁》もまた反政府組織の奉刀会に身を置いている。

性格｜朴訥な性格をしており、冷静さを失うことは滅多にない。思慮深さを備えているが率直な物言いをすることもあり、相手を戸惑わせることもしばしば。主と認めた者のために戦うことが己の使命であり幸福だと考えており、それを満たせない現状に歯痒さを感じている。

皇国人の学院生活｜鴇田宗仁が通っている天京帝立学院は、生徒の７割が共和国人である。加えて、生徒会長を務めているのは共和国の軍人であるエルザ・ヴァレンタイン。そのため、皇国人の生徒に対しては明確な区別が行われており、共和国人の生徒のみ武器の持ち込みが許可されるなどの規則がある。

好物｜鴇田宗仁の好物は豆腐であり、学食では毎日のように豆腐料理を食べている。大豆の産地から選ぶほどの豆腐好きだが、宗仁はそれが当たり前だと思っている。豆腐へのこだわりを自覚していないため、周囲からは呆れられることが多い。また、酒は好んでおらず、甘いものが好きという一面を持っている。

TOKITA KANAMI

こうしてお義兄様の妹に戻ることができて幸せです
短い時間ですけれど、

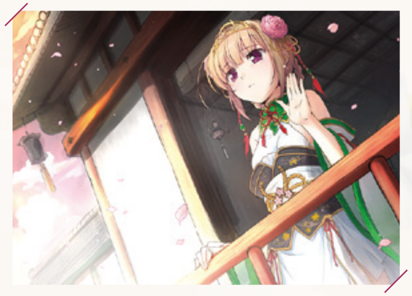
Name

翡翠帝（ひすいてい）／鴇田 奏海（ときた　かなみ）

スリーサイズ　74B／52／76　好物　ところてん

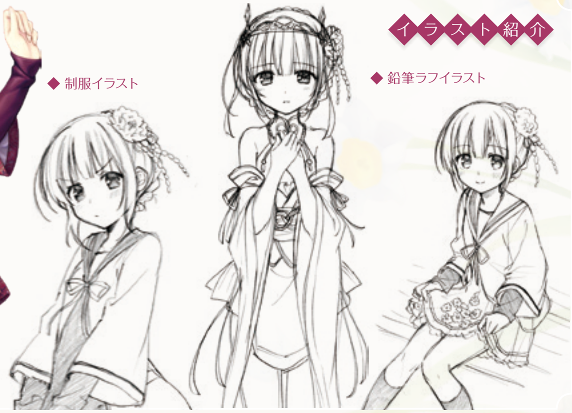
Info

戦後すぐに即位した皇国の皇帝、通称《翡翠帝（ひすいてい）》。
国民に絶大な人気を誇り、可憐な姿と涼やかな声は敗戦で傷ついた国民の心を癒やしてきました。
一般には先代皇帝の娘だと信じられていますが、実際には王家と血の繋がりはなく、正体は宗仁の義妹です。しかし、彼女の素性は最高機密とされ、兄妹ともに互いが生存していることすら知りません。
どのような事情で彼女は皇帝に即位したのでしょうか。
性格はかなり控えめ。男性の数歩後ろを静かについていくような奥ゆかしさがあります。



イラスト紹介

◆制服イラスト



◆鉛筆ラフイラスト

脱出

《鴇田奏海》は戦後、売国の徒である宰相・《小此木時彦（おこのぎときひこ）》によって偽りの皇帝に仕立て上げられる。奏海は小此木の設計した皇帝・《翡翠帝》を演じ、その儚げな姿もあり瞬く間に国民の人気を得た。翡翠帝が偽物の皇帝であると知る者はほとんどおらず、国民は僅かな疑いもなく奏海を皇帝だと信じきっている。

過去

《鴇田奏海》は中流の武人家系に生まれ、武人社会の中で育った。義兄である《鴇田宗仁》と過ごすことが何よりの幸せであり、《稲生滸》のことも姉のように慕っている。宗仁の影響で皇帝への尊敬も人一倍強く、奏海はやがて皇国という国を深く愛するようになった。

日記

《鴇田奏海》は毎日決まった時間に机に向かい、日記を付けている。日記の中でだけは《翡翠帝》という仮面を脱ぐことができ、偽りの皇帝として過ごす日々を、義兄に語りかけるようにして綴っていた。奏海にとっては心が安らぎ自由になれる唯一の時間である。

政治思想

《鴇田奏海》は宰相・《小此木時彦》の命令に一切逆らうことなく、《翡翠帝》を演じ続けている。台本上の翡翠帝は共和国との友好な関係を望んでおり、皇国民にもそれを推奨する。しかし奏海自身の思想がどこに向かっているのかは誰も知らず、奏海も決して口にしようとはしない。

爆風と喪失

戦時中、《鴇田奏海》は《鴇田宗仁》の姿を求めて戦場を駆けた。刀を取って共和国軍と戦い、ようやく宗仁の姿を発見する。そこで爆発に巻き込まれ、奏海の意識は途絶えてしまう。気付いたときには《小此木時彦》に身柄を確保されており、宗仁の行方も、宮殿から出ることも叶わぬまま偽りの皇帝となる。

孤独

《鴇田奏海》の周囲に味方といえる人物はおらず、《翡翠帝》としての毎日を監視の中で過ごしている。帝宮外に出る機会もないため、《鴇田宗仁》を探すこともままならない。宗仁を慕う心だけを支えにしており、戦前の二人の思い出を懐しむのが楽しみの一つである。

登校

《鴇田奏海》は天京にある天京帝立学院に通うことを念願にしており、終戦から三年経ったある日、突然にして《小此木時彦》の許可が下りた。死別したと思っている《鴇田宗仁》や《稲生滸》、そして真の皇族である《宮国朱璃》が同じ学院に通っていることを、この時点では知る由もない。

三種の神器

大御神の奇跡で全ての厄災を取り除き、皇国を守護すると言い伝えられる三種の神器。神器による奇跡を起こせるのは初代皇帝・《緋彌之命》の血を引く皇帝の一族だけであり、そのため《鴇田奏海》は、偽りの皇帝である己には神器を使えないことは理解している。

本日よりお側に仕えさせていただきます。
ご用がありましたら
何なりとお申し付け下さい、宗仁様

Name／

椎葉 古杜音

しいのは ことね

スリーサイズ 89E／59／86　好物 鍋料理（特にすき焼き）

Info／

二千年前から王家に仕えてきた巫女一族の末裔です。幼少の頃から厳しい修行を積み、現在は与えられたお役目に身を捧げています。彼女の行動を見るに誰か探している人物がいるようです。
明るく奔放な性格でポジティブ思考、いつも周囲を明るくしてくれます。本人は大人だと言い張っていますが、好物を前にすると自然に表情が緩んでしまったりと、まだまだ可愛らしいところもあります。
趣味は宗仁のお世話。お弁当を食べさせないと自分が体調を崩すとか。

イラスト紹介

◆ 制服イラスト

◆ 鉛筆ラフイラスト

巫女｜皇国のみに存在する神職の一つであり、呪術を操って様々な奇跡を起こすことができる。歴史は古く、皇国が建国された二千年前から存在している。巫女の役目は多く、最も重要なものが国防装置・呪壁の発動と維持であった。そのため、皇国にとって巫女の存在価値は非常に大きい。

伊瀬野｜宗教都市である伊瀬野には巫女を育成するための環境が整っており、《椎葉古杜音》は皇學舎（こうがくしゃ）という呪術を学ぶ学院に通っていた。伊勢には多くの巫女や神官が暮らしており、皇族とも縁の深い土地と言われている。そのため、皇国にとって伊瀬野は天京に次いで重要な都市である。

伊瀬野での修行と朱璃｜天京から逃げ延びた《宮国朱璃》は、皇學舎の付近にある紅葉山に隠居していた。學舎に通う巫女達からは『葉山の貴人』という呼び名で噂されており、様々な憶測が飛び交っていた。朱璃が暮らす屋敷の庭には柿が実っており、食い気の盛んな《椎葉古杜音》がそれを譲ってもらおうとしたのが二人の交流のきっかけとなる。

出会い｜思わぬところで《鴇田宗仁》に出会い、助けられた古杜音。それをきっかけとして、古杜音は奉刀会との関わりを深くしていく。もともと巫女と武人のつながりは深いが、武人である宗仁に対しては、特別な何かを感じている様子。

呪術研ぎなおし｜呪装刀の修復作業である『研ぎ』もまた、巫女のお務めの一つである。研ぎは呪術を使って行われるため、仕上がりの具合は巫女の力量に左右される。どれほど錆びて損傷した呪装刀であろうと、優れた巫女ならば刀身を一研ぎするだけで切れ味を取り戻すことが可能。

斎巫女｜敗戦から三年後、椎葉古杜音は第293代・斎巫女（いつきのみこ）に任命された。斎巫女とは皇国の建国時より存在した、国家の要職である。皇帝の傍らで国を支える存在であり、呪術の神髄を極めた者のみが任命される。巫女社会の頂点に君臨し、国民に対する隠然たる影響力は皇帝に次ぐとも言われている。

寒いギャグ｜《椎葉古杜音》は重苦しい雰囲気を払拭するため、ギャグで場を和ませようとすることがある。あまり冴えた出来ではないため周囲には呆れられてばかりだが、現皇帝である《翡翠帝》には好評らしい。戦後は共和国の言葉を学んだことで、ギャグのレパートリーが増えた。

スタイル｜身長の低さに反して、《椎葉古杜音》の胸は周囲の女性と比べてとても豊か。伊瀬野では女性に囲まれて巫女の修行ばかりをしていたせいか、自身の魅力には全く気付いていない。斎巫女となって天京に移り住んだ現在も、お務めが多忙なおかげで気付く様子はない。

私が口下手なのは宗仁が一番よく知ってるでしょ。
別にいいよ、お嫁になんか行けなくても

Name

稲生 滸

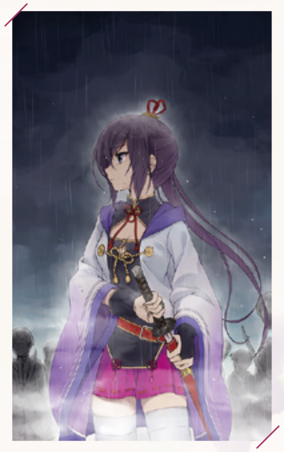
いのう ほとり

スリーサイズ 83C／57／83　好物 緑茶と納豆ご飯

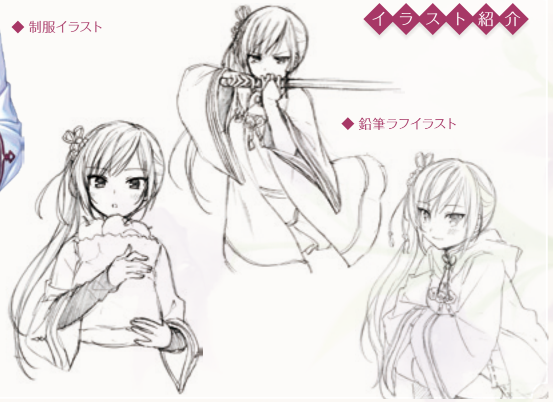
Info

代々続く武人の家に生まれ、宗仁とは幼馴染。同じ剣術道場で共に汗を流していました。戦争では明義隊の隊長として奮闘するものの、部隊は壊滅。奇跡的に一命は取り留めたものの、多くの仲間を失いました。現在は武人階級をまとめ上げ、母国の独立のために活動しています。多人数でいる時はクールで口数が少ないにもかかわらず、宗仁と二人きりになると一生懸命にしゃべります。記憶を失った彼の身を案じ、一番近くで支えてきました。

最近は組織の活動費を補うため秘密のアルバイトをしているようです。



◆制服イラスト



◆鉛筆ラフイラスト

イラスト紹介

奉刀会の成り立ちと現在

奉刀会とは、《稲生滸》の父親である《稲生刻庵》により作られた組織である。公的には、戦後に地位を失った武人を援助するための組織だが、背後では密かに打倒共和国のための準備を進めていた。決起を目前に刻庵ら重要人物が検挙されたため、現在は滸が代理会長となり完全に地下組織化している。

幼馴染

《稲生滸》と《鴇田宗仁》は同門の幼馴染であり、多くの時間を共に過ごしてきた。しかし宗仁は戦時に負った怪我が原因で記憶喪失となり、滸と過ごした時間のことも全て忘れてしまう。滸は戦前から宗仁に恋心を抱いていたが、宗仁が記憶を失ってしまったため伝えられないでいる。

父親との壁

奉刀会とは元々、《稲生滸》の父である《稲生刻庵》が作った組織である。しかし刻庵が検挙され滸が会長となってからは、過激な行動や発言をする者が現れはじめた。稲生家の当主として申し分ない能力を持っていた刻庵に対し、娘である自分は力不足であると滸は自責し続けている。

秘密の活動

奉刀会の活動で必要となる資金稼ぎのため、《稲生滸》は国民的人気歌手《菜摘》として活動している。この二人が同一人物であると知っているのは、奉刀会の会員と一部の関係者のみ。人見知りで口下手な滸が愛らしい歌手を演じるのも、皇国を取り戻すという宿願のためである。

稲生家

最古の武人は大祖と呼ばれており、その血を濃く継いでいる武人ほど力に秀でている。大祖の血筋は稲生家と槙家、そして更科家に分かれ、まとめて三祖家と呼ばれるようになった。中でも稲生家の武人は最も能力が高く、武人社会の筆頭として人々に認知されている。

呪装刀呪紋

武人の身体には生まれつき呪紋が刻まれており、特徴となる形が血筋によって共通している。呪紋には呪装刀へ武人の力を送るという機能があるが、巫女による定期的な調整が必要。《鴇田宗仁》の身体にも呪紋が刻まれているが、《椎葉古杜音》曰く、どの血筋にも当てはまらない形らしい。

数馬

《槙数馬》は稲生家に次ぐ実力を持っている槙家の現当主であり、奉刀会の副会長に就いている。会長の《稲生刻庵》が検挙されてからは過激な行動や発言が目立つようになった。武人としての力も確かであるため、代理会長である《稲生滸》は数馬から目を離すべきではないと考えている。

奉刀会構造活動

代理会長である《稲生滸》を頂点として、師範頭の《鴇田宗仁》と副会長の《槙数馬》が続く。さらにその下には一番隊から十番隊までの隊が存在する。現在の主な活動は決起を目的とした戦備の拡充と、共和国軍の情報収集。共和国軍は奉刀会が地下組織化した事に気付いていない。

知りもせずに否定するのは
好きではありません。
差し支えなければ、街を案内して下さいませんか？

Name

エルザ・ヴァレンタイン

Elsa Valentine

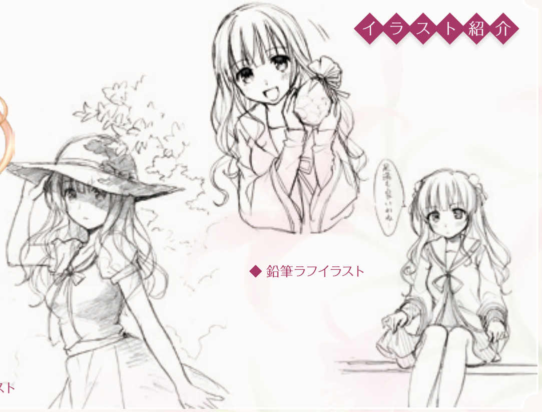
スリーサイズ 85D／58／86　好物 チョコレート

Info

学園の生徒会長を務めると同時に、共和国政府のスタッフとしても働いています。敵国のトップの娘であることは広く知られ、その言動はいつも注目の的。
皇帝や武人といった特権的身分制度を解体し、平等な世界を作ろうと考えています。
人柄は穏やかで誰からも慕われる温和な雰囲気を纏っています。しかし、皇国人に対しては異国の言葉できつい発言をしてしまうこともあります。
皇国の文化は嫌いだと言い張りつつも、お風呂だけは例外のようです。

イラスト紹介

◆制服イラスト



◆鉛筆ラフイラスト

学園
かつては皇国の名門として栄えていた天京帝立学院だが、戦後は共和国軍に接収され共和国人の通う学院となった。『身分差がない共和国の教育現場を、皇国の学生にも体験させる』という理由で皇国人の入学も許可されているが、学内では共和国人の学生が幅を利かせている。

生徒会長
《エルザ》は学院の生徒会長を務めており、主に共和国人の生徒から支持を集めている。平等性を示すため副会長の役職には皇国人を就かせているが、就任した者は例外なく短期間で学院から姿を消した。共和国による世界侵略の正当性を説くというのが講義中の恒例。

私服
身分に応じた服装を心掛けており、清潔感と高貴さの漂う服装を好んでいる。共和国風に洗練された優雅な立ち振る舞いも相まって、私服姿のエルザを軍人だと見抜ける者は少ない。たとえ皇国人であっても、エルザの美しい外見と立ち振る舞いに一度は目を奪われてしまう。

風呂好き
皇国の文化は嫌いだと言い張っている《エルザ》だが、お風呂だけは例外である。天京にある温泉施設にも密かに通っており、最近は足湯がお気に入りらしい。決して本人は口にしないが、いつか皇国中の温泉を巡りたいと思っており、こっそり温泉地を調べたりしている。

共和国での地位
多くの武勲を上げた高級軍人の《ウォーレン》を父に持つ《エルザ》は、子供の頃から優秀な軍人になるべく英才教育を受けてきた。血筋と自身の優秀さも相まって、エルザは何不自由なく軍人としての地位を確立する。ウォーレンの娘ということもあり、エルザの共和国軍内での立場はとても強い。

父親
《エルザ》の父《ウォーレン》は、自身の地位と利益追求のために戦争を続けており、共和国の侵略戦争にも積極的である。戦争によって得るものを醜く感じてるエルザは、成長するにつれウォーレンに反発を覚えるようになりつつある。同時に、憎い父の七光りで地位を得ている自分にも矛盾を感じている。

思想（理想）
共和国は『民主主義による世界平和の実現』を大義名分として侵略戦争を行っている。皇国は征服国の一つとしか考えておらず、搾取の対象でしかない。しかしエルザは、本当に皇国に民主主義を根付かせることを考えている。建前として掲げられた目的を達し、欲望のままに侵略を行う共和国を笑ってやろうと思っている。

―― 前方の信号が赤に変わる。

黒塗りの車列は前から順に速度を落とし、後ろの俺もブレーキを踏んだ。

瞬間、身体を悪寒が走る。

赤色の目を光らす信号の上に、その少女はいた。

夜陰に青ざめた式服が、寒風にたなびく。

雪の中に佇む姿は、息を飲む優美さと、一切の穢れを拒む清冽さを奇跡的に同居させている。

「逆臣、小此木時彦」

涼やかな声。

届くはずもないのに、俺の耳は確かに彼女の唇が発する音を捉えた。

「その命、もらい受ける」

赤灯が太刀を奔り、切っ先で弾ける。

柔靭な肉体が虚空に吸い込まれ――

少女の斬撃が、鋼鉄の車両を断ち割った。

千の刃濤、桃花染の皇姫

◆ 発売日未定 ◆

OfficialWebSite
http://august-soft.com/hatou/

あとがき Afterword

こんにちは。オーガストです。
『千の刃濤、桃花染の皇姫』の世界観・キャラクターをお伝えするため、フルカラーの小冊子を制作してみました。
いかがでしたでしょうか？
本作の物語は、現代日本とは少し異なる世界を舞台に展開されていきます。
この冊子から、天京の街の空気やキャラクターの息づかいを感じていただければ幸いです。
また、シナリオ上のキーワードも散りばめられておりますので、斜め読みしてしまった方は、ぜひもう一度読んでみてください。

『千の刃濤、桃花染の皇姫』の制作にあたっては、世界観やキャラクター、彩色から音楽にいたるまで、各担当者がアイデアを思う存分盛り込んでいます。
「心躍る作品」を合言葉に、スタッフ一同全力で制作に取り組んでおりますので、続報にどうぞご期待くださいませ。
それでは、今回はこの辺で。
今後ともオーガスト/ARIAをよろしくお願い致します。

2015年夏　オーガスト/ARIAスタッフ一同

千の刃濤、桃花染の皇姫

AUGUST OFFICIAL HAND BOOK

2015 SUMMER